文春文庫

炎は若い

黒岩重吾

文藝春秋

文春文庫　182—11

炎は若い　定価 440円

1980年8月25日　第1刷
1980年9月15日　第2刷

著者　黒岩重吾
発行者　杉村友一
発行所　株式会社文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町3—23　〒102
TEL 03・265・1211
落丁、乱丁本は、お手数ですが、小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します

印刷・凸版印刷　製本・加藤製本　Printed in Japan

文春文庫

炎は若い

黒岩重吾

文藝春秋

炎は若い

此为试读,需要完整PDF请访问: www.erton

札幌に来た女

千歳の空港から札幌に向う弾丸道路の両側の風景は、やはり内地のものではなかった。右側は広漠とした平野で、左側は丘陵の起伏の彼方に白い雪を残した山々が連なっている。もう季節は六月である。大阪はすでに夏の気配であったのに北海道は十四、五度らしい。遅咲きの桜さえ残っている。陽は明るくカラートタン屋根の家々を照らしている。

千歳、札幌間の道路は一本しかない。大阪ほどでもないが、かなりトラックが通るようである。

毛利龍はリアシートに深く腰を沈め煙草をくゆらしていた。北海道はこれで三度めだが、この雄大な風景は何度見ても気持が良い。ビルとスモッグ、車と人の渦、大阪という大都会の中で神経をすり減らしている三十二歳の毛利は、このような自然の風景に接すると、ふと人間を取り戻したような気になる。だが今日の毛利の眼は、青空と無限の平野の接点にぼんやりとむけられている。

千歳まで来るジェット機の中で、隣りに坐っていた二十七、八の女性の顔が思い出されてならない。美しい女性だった。いや美しいというより優雅であった。色が白く黒眼勝ちの眼が実に涼しい感じである。黒い眉だけが濃く長い。

確か紺に細かいえんじのかすりを織った結城（ゆうき）の和服を着ていた。青白い色をした鰐（わに）皮のハンドバッグを静かに膝の上に置いていた。その紺色の着物と青白いハンドバッグの対比の美しさが今

でも眼に残っている。はきものはパナマではないか。膝に置かれた蠟細工のような指には厚みのある円形の燃えるようなメキシコオパールが煌いていた。

オパールにも色々あるがあれほど厚く赤い色の玉は少ない。百万近くはするだろう、と毛利は思った。

女は殆んど顔を動かさなかった。と云って外の風景を見詰めるのでもない。黒い眼を前方の席にぼんやり漂わせている。涼しい眼なのに、遠くを見詰めているようである。

それは夢を見るというより、なにものにも興味がないような虚無的な感じさえした。

毛利は会社の仕事で良く飛行機に乗る。隣りに素敵な女性が居れば、チャンスを見付けて話し掛けるくせがある。その女性をどうしようというのではなく、緊張し続けている仕事への憩のためでもある。そんな毛利の気持が分るのか、毛利が話し掛けると、会話にのって来る女性がかなりいた。

だが今日の、隣りの女性だけは、飛行機が千歳空港に着くまで、ついに話し掛けるチャンスを持つことが出来なかった。

一分の隙がない、というのではない。見方によれば隙だらけかもしれない。それなのに毛利は話し掛けることが出来なかったのだ。何故だろう。それはあの優雅な女性から漂うなにかが、この世の何ものに対しても興味を失っているような感じがしたからかもしれない。自分の着ている着物にも、青白い鰐皮のハンドバッグにも、そして燃えるようなオパールにも……そう思った時毛利は眉をひそめた。あの真赤な内部から炎を吹き上げているようなオパールは、あの女性には不似合ではないか、むしろ青白いシルバー色の南洋産の大粒のパールなら納得出来る。

あの女は、何故そこだけ不似合な炎の宝石を煌かせていたのだろう。

プレゼントだろうか。それとも自分で選んだのだろうか。自分で選んだとすると……

毛利は漸く黄昏れ始めた雑木林の丘陵に視線を移した。あの女には外見には分らない炎のような情熱がひそんでいるのではないか。

もしプレゼントだとすると、毛利はその指輪をプレゼントした男に嫉妬を覚えた。

きっとあの女の炎を感じた男に違いないからである。千歳空港に下りた時、女は初めて誰にでも分る動作をした。肌寒さを感じたに違いない。これほど北海道が寒いとは思わず、結城の着物を着て来たのだろう。

毛利はタクシーに乗ったが、その女性は迎えに来ていた外車に乗ったようである。

男は居なかった。運転手がうやうやしく頭を下げドアを開けて女を乗せた。

多分札幌に行くに違いない。

そう思ったが女の車は支笏湖の方へ行ったようである。

毛利は札幌のホテル三愛に予約していた。新しく出来たホテルで、感じが良い。

一人になると服を脱ぎシャワーを浴びる。旅に出てホテルに着いた時の毛利のくせであった。

身体に充実感が湧いて来る。

やるぞ、という気が湧いて来る。

毛利は大阪に本社がある資本金二百五十億の坂山電機の企画調査室長であった。

これは社長の直属で、格から云えば部長級である。だが三十二歳の若さなので、一応部長待遇ということになっている。

坂山社長の優秀なブレーンの一人であった。勿論破格の出世で、同期生達はやっと係長になっ

たばかりである。優秀なものでも課長であった。
三十二歳の毛利が破格の出世をしたのは、坂山社長の縁故関係ではない。実力である。
二年前係長であった時毛利は、坂山電機に取って実に価値のある功績を残した。
そのため、坂山社長が特別抜擢したのである。
坂山社長は一代で資本金二百五十億の大電機会社をつくった。昔は小さな電機会社の一工員であった。努力の人である。
ワンマンでもあった。
だから坂山電機では、年功序列というものがない。能力のある者は幾らでも出世し、ないものは何時までも平社員でおらねばならない。
だから社内は何時も緊張し切っている。社内に入れば部長以下オペレーター（工員）に到るまで同じ作業服を着て仕事をする。
ただ襟のところに線があり、オペレーターは黒、事務職員は緑、技術職員は黄と色分けされている。係長は二本、課長は三本、部長は四本である。
部長でも取締役部長だけが背広姿である。坂山社長は作業服であった。
毛利が今日札幌に来た名目は、そんなに重要な仕事ではない。
札幌における坂山電機の総代理店長と、北海道における電化製品の販売促進について意見を交すことであった。
坂山電機には販売促進部があるから、これは毛利の本来の任務ではない。
別な目的がある。それは社の秘密の仕事であった。
企画室というのは、坂山電機に取っては、機密の仕事に属する。他の会社の乗取り併合から、

破産させることまでせねばならない。産業スパイめいたことも時にはやる。
つまりなんでも屋であり、それだけ社に取っては重要な仕事とも云えよう。
間もなく毛利はシャワーを水に変えた。冷たい。身体が凍るような気がする。毛利の引き締った筋肉が更に締る。
これも毛利のくせであった。
必ず最後は水を浴びるのである。バスルームから出ると早速代理店に電話した。
「毛利です、何時も御苦労さまです」
と毛利は丁重に云った。会社の生命はなんと云っても商品を売ることである。
だから代理店は大切にせねばならない。とくに電機業界は最近過剰生産で売れ行きが香(かんば)しくない。
電化製品を扱っている代理店は利潤も薄く何処(どこ)も苦しい。
「もうお着きですか、今日いらっしゃることは分っていましたが、何時の飛行機か分らないので、お迎えにも行かず失礼しました」
「一寸東京で用事を済ませたものですから」
毛利は坂山電機の総代理店、小村商会の社長と会う時間を決めると、次にダイヤルを伊勢子のアパートに廻した。
長柄(ながら)伊勢子は札幌ではかなり名の通ったバーMSの傭われマダムであった。
一昨年やはり小村社長と飲みに行って、なんとなく関係してしまった。
三代前はアイヌだったという長柄伊勢子は彫りの深い顔をしている。
道内の男は、そういう顔の女性を見ると、新しく内地から来た男に、あれはアイヌの血が交っ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

ていますよ、と説明する。

確かに伊勢子の顔は日本人離れがしている。眼が大きく光りが強い。眉毛も濃く髪の毛が密生している。良く締った身体で、五尺三寸なのに十五貫ほどあった。

だが都会に居る十五貫の女性のように太った感じがしない。

贅肉が少しもない。勿論女らしい柔かい曲線は女以外のなにものでもないが、固太りなのだろう。去年会った時、伊勢子は笑いながら自分の太腿をつねってごらんなさい、と云ったことがあった。

ところが幾らつまもうとしても、つまめないのである。指がすべるのだ。それほど伊勢子の身体は締っていた。

幸い伊勢子はまだ店に出ずアパートに居た。毛利の声を聞くと、

「あら、お久し振りね……」

とたんたんとした調子で云った。普通ならこんなことばを聞くと、忘れられた、と思うだろう。そしてそれが常識の筈であった。

ところが伊勢子はそれが地である。男性的な性格なのか、燃える時はもの凄く燃えるが、それまではたんたんとしている。

毛利が北海道を訪れるのは一年に一度位である。大阪から電話を掛けたりはしない。だが伊勢子はそんなことなど少しも気にしていない。と云って、金のために毛利と寝るのでもなさそうである。兎に角変った女だった。

「今夜は先約があるかい？」

と毛利は尋ねた。
「今のところないわ」
「じゃ、君さえ良かったら会いたいんだが」
「ええ、良いわよ、私の店に来てくれる？」
「うん、小村さんと一緒に行くよ、それから出よう、小村さんに気付かれないようにな」
「馬鹿ね、そんなこと私にまかせておいて頂戴」
と伊勢子は云った。
これで今夜は思う存分楽しめそうである。だが問題は明日なのだ。明日は大阪から相田義介がやって来る。相田はなんのために札幌に来るのだろうか。
相田義介は得体の知れない男である。昔は大蔵官僚で官吏としては出世コースの最右翼を歩んでいた。ところが関西国税局の査察部長時代、どういう理由でか官吏をやめたのである。今はなにをしているのか分らない。
だが脱税の摘発があった場合、相田に頼むと三分の一位の金額で済むと云う。
それに計理には職業柄実に詳しい。坂山社長はそんな相田に眼をつけ、月十万の捨て金を相田に与えている。
その代り相田は時々思い掛けない情報を坂山社長に提供しているようであった。
一週間前、毛利は坂山社長に呼ばれた。三十二歳位で、坂山社長と話が出来るのは毛利位ではないか。
坂山は小柄であった。色が黒く顔には深い皺が幾本も刻み込まれている。
六十五歳である。皺が刻み込まれているのは彼の半生の苦労をもの語るが、そんな顔の割合に

しては若い。
五十五、六と云った感じである。
精気が顔に充満しているせいかもしれない。兎に角奇妙な顔であった。
毛利は坂山社長の顔を見るたびに、豊臣秀吉はこんな顔ではなかったか、と思う。
毛利は直立不動の姿勢で坂山社長の前に立った。
「どんな御用で御座居ましょうか」
「うん、坐れ」
坂山は顎で肘掛椅子を指した。
来客用の社長室は、この部屋の隣りにある。その隣りは、社長に会うための来客室があり、何時も数人の客が待っている。
この奥の部屋には、よほどの人物しか来ない。毛利が腰を下ろすと、坂山は、
「君は相田義介を知っているかね」
「はあ、二、三度会ったことがありますが」
「わしは相田を可愛がって来た、ところが最近相田の動きに、どうもふにおちない点がある、現在の電機業界は喰うか喰われるかの戦場だ、少しの油断も許されない、わしは相田には君の仕事の内容は云っていない、君は当分他の仕事をけずっても相田の動きを探って貰いたい」
それが坂山が毛利に与えた命令であったのだ。機密費は幾ら出しても良いと云う。
それから毛利は相田の行動を探り始めた。そのために訓練された若手の部下を二人使った。相田義介が明日北海道にやって来るのを突きとめたのは三日前である。
ホテル三愛に予約したことまで調べた。

毛利が札幌にやって来た本当の目的は相田の行動を探ることであったのだ。
その夜、毛利は小村社長と、専務の松林と会った。
北海道の食べものはうまい、生うにでもいくらでも毛蟹(けがに)でも、東京大阪の一流店で味わえない新鮮なものが喰べられる。
毛利はそれこそ、もりもりと喰べた。
十時頃三人はフードセンター街にあるバーMSに行った。
伊勢子は毛利を見ると黒い大きな眼で笑った。そして走り寄ると小村の手を握った。伊勢子が毛利に愛想をふりまいたのは、その一瞬だけである。あとは適当に相手になる位である。
小村社長の方が恐縮がり、
「おい伊勢子、大阪からわざわざ見えた大事なお客さんだよ、わしのような老人にお世辞など使わんでも良い」
と云った位である。
伊勢子は大きな鼻を動かした。
「私、若い人はどうも苦手なの、とくに毛利さんのような自信家は」
「おいおい淋しいな、俺が自信家振ってるかな」
「態度には出ていないわ、でも身体から発散している」
と伊勢子が云った。
「やられましたね」
と専務が答えた。
三人はそれでもラストの十二時近くまでいただろうか。

伊勢子が小村社長に、ナイトクラブに連れて行って欲しい、と云った。
小村社長はすでに五十過ぎだ。そろそろ疲労を覚えている。
「僕が連れて行ってやるよ」
毛利が云うとすかさず伊勢子が、
「まあ嬉しい、じゃ社長さん、私毛利さんとナイトクラブに行くから」
小村社長が恐縮したように、
「すみませんなあ、北海道の女性はみんなこうなので、どうも」
毛利は笑顔で、
「東京でも大阪でも一緒ですよ」
と云った。
伊勢子は直ぐハンドバッグを持って来た。傍についていた若い女が伊勢子に、自分も連れて行って欲しいと頼んだが、
「今夜はだめ」
と一言のもとに撥ねつけたようである。
バーMSの前で毛利と伊勢子は小村達と別れた。タクシーに乗った。毛利はナイトクラブになど行く積りはない。
伊勢子の耳に、
「なあ、何処か良いホテル知らないかい、がやがやした札幌のナイトクラブはどうも性に合わない」
「分ってるわよ」

と伊勢子は答え、行先を運転手に告げた。
「元気だったかい」
「ええ、毎日頑張っているわ、今年の小豆相場では一寸儲けたの」
毛利は驚いた。
伊勢子が小豆相場などやっているとは、少しも思わなかったからである。
小豆相場は相場の中では最も危険な相場である。一夜で乞食になり一夜で大金持になるのは、現在では小豆相場だけではないか。
「君が小豆相場なんかやるとは」
「面白いわよ相場って、人間と同じじゃない、明日がどうなるか分らない、でも自分が自分の思った通りに賭ける、これほど面白いものはないわ」
「買っていたんだね」
「ええ、私のおじいさんはアイヌなの、天候異変を伊勢子は肌で感じることが出来るの、今年は冷害で穀物は不作だと思ったわ」
「どの位儲けたの」
「それは云わないわ」
「聞きたいな！」
「私は知らない人には財産のことは云わないことにしているの」
毛利はがんと一発頬を擲られたような気がした。二年間に、毛利は二、三度会ったろうか。勿論ホテルに泊り朝まで汗みどろで燃えた。そんな毛利も伊勢子に取っては知らない人なのである。
間もなくタクシーは新しく出来たホテルの前に停った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton